

があるように感じられた。

(高橋浩一郎)

### 9. あとがき

今回のシンポジウムに提出された論文のなかでは、地質時代や歴史時代を対象とした論文が非常に少なかった。古気候指標や古記録によって過去の気候を分析することをさらに強化しなければならない。このシンポジウムのテーマである将来の気候を論じたものが少なかった

のも意外であった。しかし、これは問題の難かしさを反映しているともいえよう。海面水温や El Niño/Southern Oscillation を扱った論文が全体の3分の1に達したことは、この問題が今回および近い将来の気候学の中心テーマであることを意味しよう。なお、このシンポジウムのプロシーディングスは1985年に刊行される予定である。(吉野正敏)



M.M. Yoshino 編

## Climate and agricultural land use in monsoon Asia

University of Tokyo press, pp. 398, 1984年.

編者のまえがきによると、この本の出版は、IGU（国際地理学連合）の中につくられた、熱帯気候と居住に関する作業委員会の中の1つの仕事として計画されたものである。したがって、執筆者たちは、フランス、アメリカ、ドイツ、日本、中国、フィリピン、インド、マレーシア、タイなどの地理学者、気候学者、農学者などであり、国際色が深い。英文でかなり厚く、読むのにはかなり時間がかかるが、日本だけではなく、アジア各国の方々にも参考になるだろう。

本の表題からわかるように、モンスーン・アジアの各地の気候の特性、気候と農業との関連、土地の利用状況およびその場合の問題点などを中心として書かれた論文集である。執筆者は地理学系統の人が多く、この本の内容にも、それが反映している。

.4部にわかれ、第I部では、モンスーン・アジアの気候、気候の区分、日射量、熱収支、水収支など、農業に関する気候特性について書かれている。第II部では、気候と農業形態との関連、土地利用における問題を扱っている。土地をうまく利用するためには、自然条件だけではなく、人間の対応も重要であることを総論的に述べている。たとえば灌漑技術、作物や家畜の選択によって、土地の利用価値が変わってくることを具体的な例をあげて述べている。この部分が本書の中心となるものである。第III部では、モンスーン・アジアの各国における気

候、農業、林業、畜産、それらの関連、各国におけるそれらの経済的地位などについて述べている。第IV部では、モンスーン・アジアと世界の他の地域との比較を行っている。

その内容から見て、純粹の気象学者には、あまり興味がなかもしれない。しかし、気候と社会との関連が大きな問題となっている今日、この種の本を見ておくことも必要であると思う。この本を見て感ずることの1つは、気候の知識を社会に利用しようという場合、単に気候を知るだけではなく、いろいろの因子が複雑に影響を及ぼし、とくに土地利用という場合には、それらを総合的に知ることが必要だということである。また、具体的に、どここの問題となると、マクロの気候の知識では不十分なものが多い。

国際化が進み、モンスーン・アジアの各国に出かける人も多だろう。このような人々にとっては、各地の気候、土地利用の状況を知ることが必要であり、このような方々には、本書はよい参考になるだろう。とくに多くの文献の表もせられているので、くわしいことを勉強する場合に役に立つであろう。それぞれの国にはそれぞれの特徴があり、日本の知識だけでは成立しないことも多い。たとえば、日本の農業では、気温の高低が大きく効くが、東南アジアの各国では、むしろ降水量の多少が重要である。また、フィリピンでは、台風が問題であり、これは日本と同じであるが、襲来する季節は違い、同じフィリピンでも北と南では違う。ただ、フィリピンの台風の記述でちょっと気になったのは、その移動速度を50 km/hとしていることである。われわれの常識ではその半分くらいであり、風速と混同したか、ミスプリントではあるまいか。(高橋浩一郎)